

原 著

「ママ友」の交友関係におけるネットワーク形成とその影響

—豊島区・新宿区を参考に—

塩塚 実奈

社会情報大学院大学 広報・情報研究科 2期生

要 旨

出産したばかりの母親は、先の見えない不安、核家族化の影響によって生じるワンオペから産後うつに陥る母親もいる。ママ友は、時に母親にとって負担に感じる場合もある。しかし、筆者は、母親にとってママ友は必ずしも負担な存在ではなく、子育てをする上で必要不可欠な存在だと考える。核家族化が進む、特に都市部に住む母親にとって、ママ友は精神的にも子育てをする上でも必要な存在である。

本論文では、母親を取り巻く現代社会におけるママ友の役割、ママ友交友関係におけるネットワーク形成とその影響についてまとめている。そして、母親間で交わされる情報共有、母親自身が情報発信の担い手としての可能性について明らかにした。これらのことをふまえ、ママ友グループの形成、特長を活かした活用方法を提案している。

キーワード：ママ友、ネットワーク、交友関係

1 はじめに

1.1 本研究の背景

筆者は出産前、ママ友¹⁾に対して否定的な見方をしていた。テレビや雑誌で取り上げられるような紛らわしいママ友トラブル²⁾に巻き込まれるならば、ママ友はいない方がよいと考えていた。ママ友はあくまで子どもを介した繋がりである表面的な関係だと思っていたからだ。

しかし実際は、出産前に描いていた紛らわしいママ友とは全く違うママ友が自分の周りにはたくさんいる。そして母親にとってママ友間での情報共有の影響を実感している。特に都市部に住む核家族の母親は、生活面、教育面における地域の情報を、ママ友ネットワークをうまく活用し、時には助け合い、生活に必要な情報をうまく取り入れているのではないかと推測する。本論文では、母親にとってのママ友の存在、役割を明らかにしていく。

1.2 研究目的

本研究では小学生以上の子どもをもつ母親にとってママ友は、子育て、生活をする上でプラスに働きかける存在で、

互いに助け合う存在であると考え。また、母親にとってママ友との付き合いが“楽”と感じるのは、子どもが小学生に上がる頃だと推測する。母親同士で交わされる情報の中には、自分が実際使った商品の感想、地域の情報、学習塾、学校など教育に関わる情報、ニュースで取り上げられた事件など生活にまつわる情報が多々ある。ママ友交友関係により、母親自身を含め家族の身の回りに関わる情報を常に開知し共有し合い、言わば母親一人一人が情報の懸け橋になっていると言える。ママ友ネットワークで得られた情報を母親が他のママ友に対して発信し、母親自身が情報発信の担い手となる可能性について明らかにしていく。

仮に母親が情報の懸け橋としての役割を担う可能性があるならば、ママ友交友関係形成の特徴を活かした活用方法を考察していく。

そのためにもまずは、小学生以上の子どもを持つ母親の交友関係について明らかにする。乳幼児期は子どもとセットの時間が多く、母親同士親役としてママ友と接する機会が多い。子どもが小学生になると子どもの送り迎えは基本必要なくなる。子どもとセットの時間も必然的に減っていく。母親は自分個人の時間が増え、母親自身関わりたい人

表1 23区小学生、中学生児童数ランキング

小学生児童数 (令和3年度)					中学生生徒数 (令和3年度)				
		児童数	男	女			生徒数	男	女
1	世田谷区	42,953	21,718	21,235	1	世田谷区	21,234	10,378	10,856
2	練馬区	34,301	17,517	16,784	2	江戸川区	15,874	7,860	8,014
3	江戸川区	33,665	17,282	16,383	3	練馬区	15,610	8,344	7,266
4	足立区	30,773	15,667	15,106	4	足立区	14,298	7,741	6,557
5	大田区	30,491	15,695	14,796	5	大田区	11,827	6,240	5,587
6	江東区	24,475	12,597	11,878	6	板橋区	11,477	6,088	5,389
7	板橋区	24,202	12,530	11,672	7	杉並区	10,811	5,207	5,604
8	杉並区	22,553	11,256	11,297	8	港区	9,438	4,737	4,701
9	葛飾区	20,611	10,548	10,063	9	江東区	9,370	5,076	4,294
10	北区	14,334	7,339	6,995	10	葛飾区	9,246	4,824	4,422
11	品川区	13,826	7,148	6,678	11	文京区	8,942	4,551	4,391
12	文京区	12,702	6,208	6,494	12	豊島区	7,483	4,354	3,129
13	港区	11,330	5,372	5,958	13	北区	6,837	3,568	3,269
14	中野区	11,238	5,824	5,414	14	新宿区	6,291	4,299	1,992
15	目黒区	11,183	5,900	5,283	15	千代田区	6,246	977	5,269
16	新宿区	10,721	5,526	5,195	16	中野区	6,207	3,217	2,990
17	墨田区	10,251	5,289	4,962	17	品川区	6,104	3,020	3,084
18	豊島区	10,207	5,379	4,828	18	墨田区	5,554	2,950	2,604
19	渋谷区	9,242	4,689	4,553	19	渋谷区	4,907	1,715	3,192
20	荒川区	9,036	4,615	4,421	20	目黒区	4,463	2,444	2,019
21	中央区	8,125	4,146	3,979	21	荒川区	4,304	2,668	1,636
22	台東区	7,101	3,651	3,450	22	台東区	2,915	1,518	1,397
23	千代田区	5,134	2,447	2,687	23	中央区	2,103	1,044	1,059

資料：東京都総務局統計部 学校基本統計（学校基本調査報告書）、令和3年度
URL: <https://www.toukei.metro.tokyo.lg.jp/gakkou/2021/gk21qg10000.htm#shou> を参考に筆者作成

との繋がりが強くなると考える。母親同士友好的な交友関係を築けていれば、そこで交わされる情報交換は母親にとっても有意義な情報だと言える。ママ友間で交わされている情報共有の内容についても母親同士の会話から分析する。

調査対象地域は豊島区、新宿区とし、公立小学校に通う子どもを持つ母親に面接による半構造化インタビューを実施した。

ここで調査対象地域の豊島区、新宿区について23区内でどのような地域なのかを明らかにする。まず、小学生の児童数を東京都総務局統計部 学校基本統計（学校基本調査報告書）の令和3年度を参考に比較する。豊島区は23区中18位、新宿区は16位。中学生の生徒数は新宿区が14位、豊島区が12位となった（私立、公立含めた総数）。小学生の児童数は23区内でも下位に位置し、中学生の児童数は23区内の中間あたりの順位という結果だった（表1を参照）。児童数で言えば23区内では決して多い地域とは言えない。

次に、世帯年収を総務省「課税標準額段階別令和2年度分所得割額等に関する調」より「課税対象所得÷納税義務者数」にて年収を算出すると、令和2年度の東京23区の平均所得年収が約535万円だった。東京都23区の平均所得年収が一番高い区は港区で約1163万円、一番低い区は足立区で約347万円、新宿区は8位で約555万円、豊島区は11位で約460万円だった。新宿区は平均よりやや高い金額で豊島区は平均より低い金額となった。しかし、港区のように平均金額より極端に高いわけでもなく平均金額に比較的近い所得年収のため23区の中において妥当な平均年収区域と言える。

1.3 母親を取り巻く現代社会

近年の核家族化、少子化、近隣との希薄化の影響で、実際に子育てを間近で見ない世代が現在母親になっていることが多い。そのため母親は、第一子の子育て全てが初めての経験となる。そのような状況の中、母親を取り巻く現代社会の問題点がさらに母親を追い込む。

1点目は、母親一人に対する家事負担である。日本は先進国の中でも男性の家事・育児の参加時間が低水準で、6歳未満の子どもを持つ夫の1日当たりの家事・育児に費やす時間は、1時間23分と米国の3時間10分に比べて3分の1近く短い（野村総合研究所、2019『知的資産創造』10月号 Vol. 27 No. 10）。男性の育児参加の意識が高くなってきているとは言え、実際はまだ、母親に対する育児の負担が先進国の中でも大きいことが分かる。このことは男性の就労時間にも関係している。松田（2008）によると、男性の育児への意識の高まりは近年高まってきているにも関わらず、実際育児参加ができない原因は、長時間労働にあるという。長時間労働からくる父親の時間的な余裕のなさ、そしてそれを許容している社会構造が原因だと指摘している。

2点目は、育児不安である。出産間もない母親は、外との繋がりもままならない中で、子育てに試行錯誤する。「産後うつ」という言葉が世の中に浸透しているほど、先の見えない育児に対して不安を抱いている母親も多い。母親の育児不安に関する研究も多くあるが、この領域ですぐれた研究者、原田正文は、1980年と2003年の約20年間の比較によって、母親の孤立化や精神的ストレスの増大を明らかにしている。また、2016年にNHKで放映された「ママたちが非常事態!？」（同書籍も発行）では、「孤育て」とも言われる現代の母親たちの子育ての悩みを科学的な視点から検証した内容を放映した。番組では京都大学霊長類研究所、松沢氏の「人間は、一人で育てようにはできていない」と紹介していた。「歴史的にみても人間は共同体で一緒に子どもを守って育てる、共同養育してきたため、産後の孤独や不安は他の母親との結びつきをつくるための仕組みであり、子どもの生存可能性をより高めたのだと研究者たちは考えている」と紹介した。番組では松沢氏が長年研究しているチンパンジーと、人間の育てについてもふれていた。チンパンジーは、母親が単独で約5年子どもを育てる。その間母親は子どもを産まない。そのためチンパンジーは物理的に多くの子どもを産むことができない。一方、人間は一人の子どもを多数で育てる方法によって多くの子どもを産むことができた。太古の人類の生活を今も維持しているアフリカ・カメルーンのユニークな部族、バカ族を例に説明していた。バカ族は部族の母親が共同で子どもを育てている。生後3ヶ月の赤ちゃんを残して母親が森に仕事に行くと、別の母親がその赤ちゃんを授乳し面倒をみていた。自分の子どもを他人に任せるのは動物の中でも人間だけだ。共同で養育するという独自の育て術を人間は編み出した。「出産直後、母親のエストロゲンが減少するのは、共同養育を母に促すためそうなのではないか、不安や孤独を感じれば、仲間と一緒に子育てをしたくなる。人間は

進化の過程で共同で保育をするようにできている。必要な時は子どもを預けられるようにできているのに、現在は誰も助けてくれるわけではない。そういう風には人間は作られていない。」と松沢氏は番組内で語っていた。

今も、共同養育の本能が人間には残っているのにも関わらず、現代の社会は核家族化が進み、子育ては母親一人に負担がのしかかっている。共同養育の仕組みがなくなった今も、母親の孤独感だけが残り、共同養育の仲間を求めているのかもしれない。不安、孤独感を共有できる自分と同じ状況に置かれた母親、ママ友を求めるのは必然だと考える。

2 ママ友の機能 先行研究及び実態調査の整理

ママ友は成人期の交友関係とは違い、母親単独で形成することはできなく、あくまで子どもを介して形成される。そのため、価値観の違いや教育方針の違い、個人的な志向の違いなど成人期では友人関係にならなかった人とも（繋がりやの深さはあれど）付き合っていかなければならないこともある。関係を維持する中で、ママ友との関わりがストレスにつながることも指摘されている（河村、2016）。一方、お互いに悩みを共有したり、相談したりすることで育児ストレスが解消されることも考えられている（工藤、2013）。

宮木（2004）の研究では、乳幼児の子どもをもつ母親696名にアンケート調査を行い、母親にとってのママ友の存在を明らかにしている³⁾。アンケート結果（図1）から世代別での母親の価値観の違いもうかがえるが、全般的に母親にとってママ友は「頼りになる存在」「お互い助け合っている存在」などプラス面にはたつきかけている存在だと理解できる。

實川・砂上（2013）⁴⁾の研究では、母親はママ友に対して「個としての同質感」と「親役割の同質感」の2種類の同質感を意識しながらママ友に接していると指摘する。「個としての同質感」は自分個人の志向、価値観が合う母親を求め、「親役割の同質感」は「親の役割を担う者同士」の同質感（子どもの年齢の近さ、子どもを育てる親同士の共感）を求めている。この2種類の同質感の高低を関連させながら親しさの度合いを決めているという。子どもの年齢が同じくらいで、自分と置かれている状況、価値観が似ていると、個にしても親役割にしても母親は同質感、分かり合える相手を求めていることがわかる。（図2）

また、ママ友グループの研究では、グループの特徴を3つに「閉鎖性」、「階層性」、「親和性」と分け、それぞれのグループでの母親の傾向、関わり方を指摘した（大嶽2017）。大嶽は小学生以下の子どもを育てている母親205名からアンケート調査⁵⁾を行い、ママ友グループの特徴尺度について因子分析を実施し分析している。3つのグループに共通したことは「同調志向」だった。グループの特徴によって「同調志向」のその中身が変化するが、母親間で

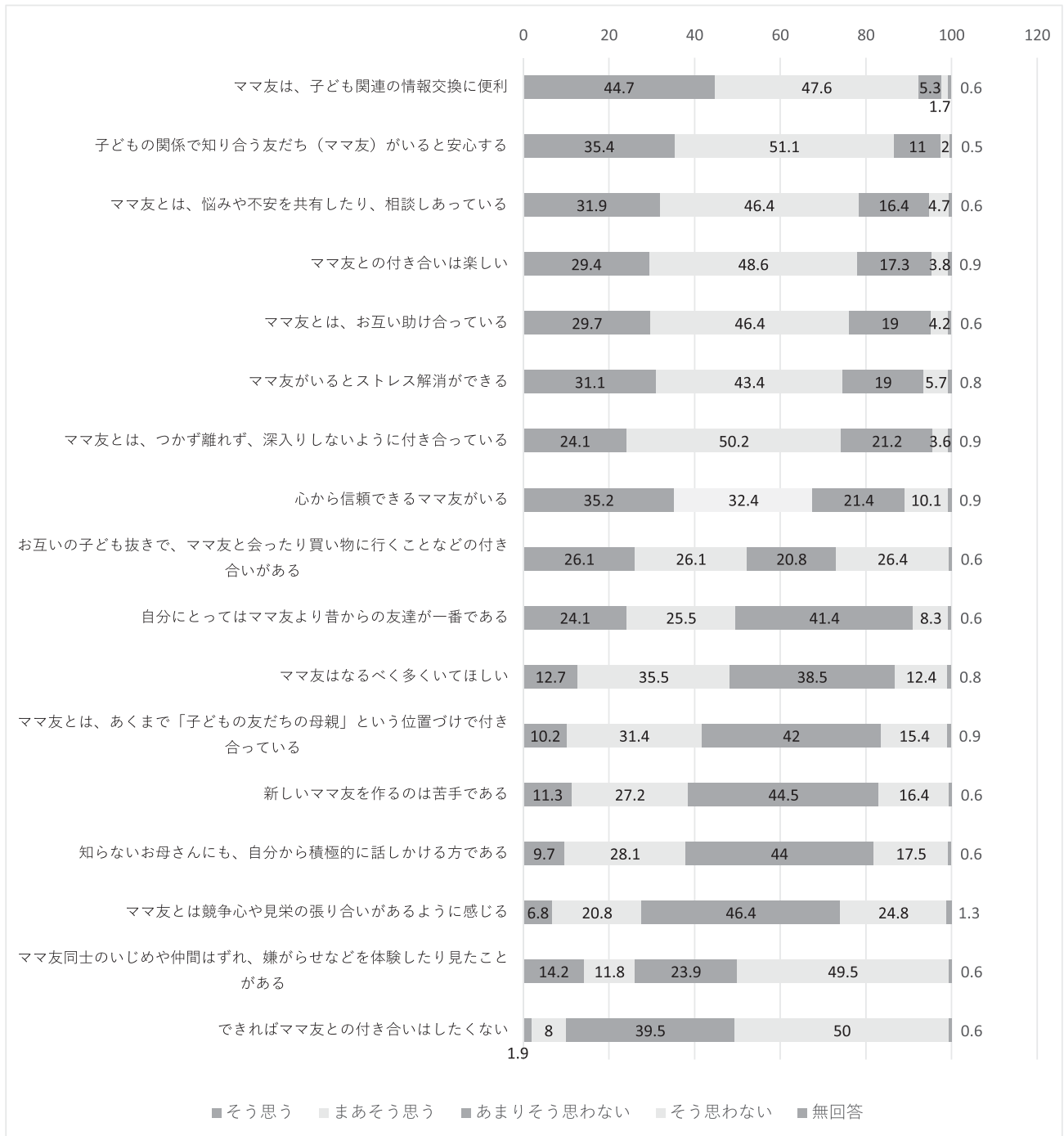


図1 ママ友に対する考え方 (n=696)

資料：宮木 由貴子（2004）「『ママ友』の友人関係と通信メディアの役割—ケータイ・メール・インターネットが展開する新しい関係—」第一生命経済研究所『ライフデザインレポート』第159巻，p8をもとに筆者が作成

の「同調」には意味があるものと分かる。

子育て期の母親の友人ネットワークに関して、實川(2010)⁶⁾は、母親の青年期（学生時代）から出産後の友人関係についてまとめている。出産前後の頃は友人関係との交流が途絶えがちになる。第1子が2歳～3歳になるまでに、母親は公園、サークル、習い事、児童館など子どもを

連れて様々などところに行くようになる。そこで母親同士のネットワークが形成され拡大していく。子どもの養育目的で同年齢の子どもの集まる場所を求めて母親が出かけていくことが指摘されている。しかし、出かけていく理由は、養育目的だけではなく、母親が自分の友達を求めていたことも指摘している。

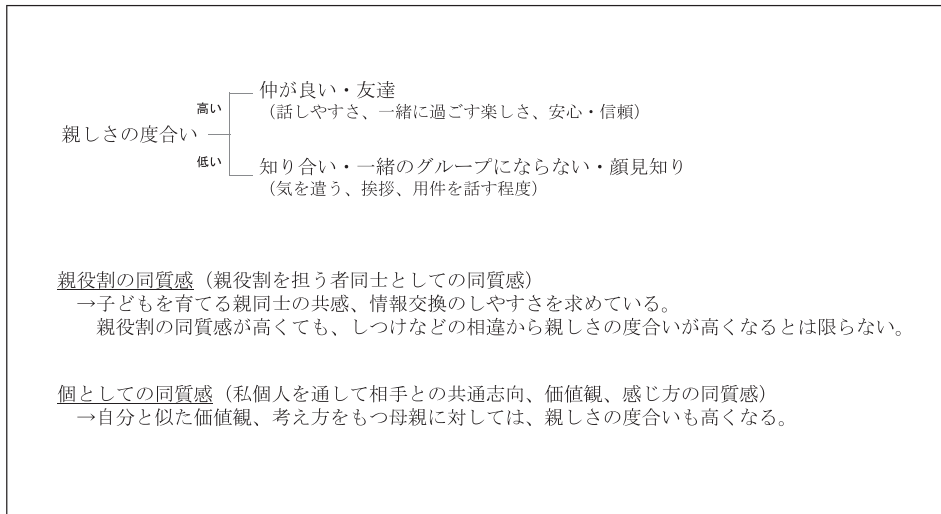


図2 親しさの度合いについて

資料：實川 慎子・砂上 史子 (2013) 『母親自身の語りにもみる「ママ友」関係の特徴—相手との親しさの違いに注目して—, 『保育学研究』第51巻第1号 2013年を参考に筆者作成

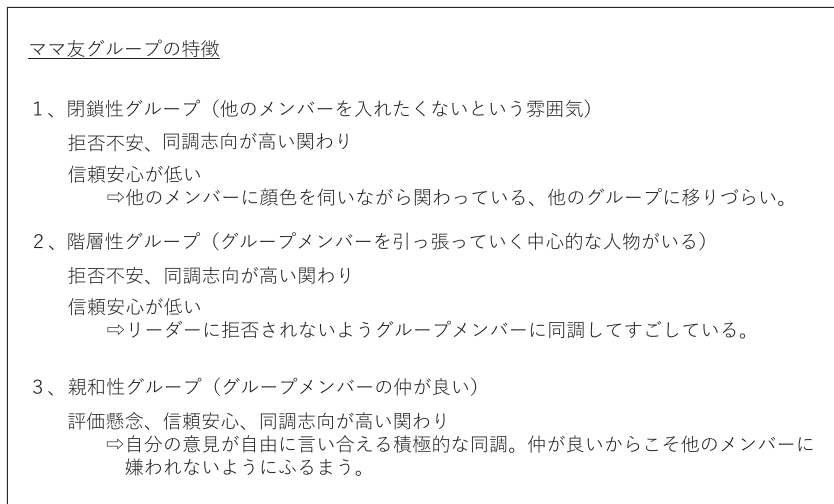


図3 ママ友グループの特徴 筆者作成

資料：嶽 さと子 (2017) 『子育て期における母親同士の友人グループの特徴とその関わり方との関連』『名古屋女子大学紀要』63 (人・社) pp 369-379 調査期間：2014年3月～4月を参考に筆者作成

近年の核家族化，近隣との希薄化が進んだ都市部では特に，母親にとって，子育ての不安，大変さ，または喜びを共に分かり合える仲間が必要で，人間が本来行っていた共同養育の視点からも共感，同調してくれる人を持つことは必然なのかもしれない。その役割を身近なママ友が担っていると考える。

3 調査，分析

3.1 インタビュー概要，方法

本論文では子どもが小学生以上になった母親に対して，ママ友交友関係の発展について半構形式でインタビューした。實川 (2010) の研究を参考に母親自身がママ友をどのようにとらえ付き合いをしているのかを把握するため，

知り合ったきっかけ，具体的な付き合い方 (話す内容や行動) を中心により具体的なエピソードも提供してもらえるよう調査を行った。母親のライフワーク (妊娠時から現在) にそって，ママ友との関係性，特に母親自身が「仲が良い」と感じている母親とどのように知り合い，どうして仲が良いか，幼児期とそれ以降とでは付き合い方に変化があったかを詳しく聞いた。「仲が良い」かどうかの基準は母親自身の主観で話してもらっている。

なお本論文においての「仲が良い」とは母親自身気が合い積極的に仲良くしている，と定義つける。ママ友の中には気は合わないが表面的に仲良くしているママ友もいる。その場合は「表面的に仲良くしているママ友 (母親)」と明記する。

3.2 調査協力者、調査時期

豊島区、新宿区に在住で公立小学校に通っている子ども（兄妹に中学生、高校生、大学生の場合は私立に通っている子どももいた。）を持つ母親16名（年齢30～50代）を対象に（表2を参照）面接による半構造化インタビューとアンケートを行った。協力者は、筆者の知人を介して募った。面接はすべて筆者が行い、面接回数は1人あたり1回、平均面接時間は1時間40分だった。アンケートは2019年12月に実施し、面接を行った期間は、2019年9月～12月である。

協力者のA～Kの職業は、専業主婦もしくはパート勤めで、子どもが小学校に入学前は幼稚園に預けていた。協力者L～Pはフルタイムでの仕事をしているため、子どもが小学校入学前は保育園に預けていた。なお協力者Nは保育園、幼稚園の両方に子どもを預けていた。

3.3 本論文におけるママ友の定義

ここで本論文におけるママ友の定義を明らかにする。先行研究ではママ友は「子どもを介した母親の友人関係」を示し（2004宮木）、（2011金）、（2013實川・砂上）、本論文でも同様に捉える。ただし、出産前、母親学級、病院等

など妊娠中に会い、友人関係となった者も含む。

研究にあたり、16人の母親がインタビューをした際、2名の母親のみ出産前からの友人関係にあった母親の話が上がった。しかし、いずれも「幼馴染」、「職場の同僚」と母親本人もママ友とは言わず、自分自身の元々の友人関係を示した。その上で、お互いの出産時期の近さ（前後2年）もあり、子どもの年齢に近いこともあって友人関係が続いていると語っていた。よって、本論文においても出産前から友人関係にあった者はママ友と分けて捉えることにする。

3.4 ママ友の種類

インタビューで話されるママ友に種類があることがわかった。その捉え方を明確にするため、インタビューをもとにママ友を4種類に分類できた（図4を参照）。

まず、母親自身の気が合う仲が良いママ友「親のためのママ友」と命名、親同士も子ども同士も仲が良いママ友「親子のためのママ友」と命名、母親自身気は合わないが子ども同士仲が良いので表面的に仲良くしているママ友「子どものためのママ友」と命名、親同士も子ども同士もそこまで仲良くなく同じ学校、習い事などに所属している知り合い程度のママ友「知り合い」とで分類できた。母親がママ友に対してどのような点を親しいと感じているか、母親にとってママ友の役割とは何かについては3.5～3.8にて記載していく。

次に「個としての自分」と「親役割としての自分」との関わりを整理する。ここでの「個としての自分」は、母親が相手の母親に対して「私個人」を通してどのように感じているのか、また「親役割としての自分」はあくまで子どもの「親」として相手の母親にどのように接しているのか、という視点で整理する。

気の合い仲が良いママ友は「個としての自分」が強く関わっている。親同士も子ども同士も仲が良いママ友は、「個としての自分」と「親役割としての自分」が強く関わっている。子ども同士仲が良くそのためあくまで表面的に仲良くしているママ友は、「親役割としての自分」が強く関わっている。子ども同士もそこまで仲が良くなく同じ学校、習い事などに所属している知り合い程度のママ友も、「親役割としての自分」が強く関わっている。

3.5 気の合うママ友、気の合わないママ友の特徴

3.4ではママ友の種類について分類した。母親自身仲が良いと感じている「親のためのママ友」、「親子のためのママ友」はどのような点で気が合うのか、また「子どものためのママ友」のように気が合わないママ友はどのような点で距離を置こうと感じているのかを明らかにするため、インタビューをした16名の母親に下記のアンケートを実施した。（質問数は4つ）

表2 協力者プロフィール

調査期間：2019年9月～2019年12月

協力者	協力者年齢	職業	家族	子どもの年齢、性別
A	40代	パート	夫、子ども2人、本人	11歳女兒、9歳女兒
B	30代	パート	夫、子ども2人、本人	13歳女兒、10歳男児
C	40代	パート	夫、子ども3人、本人	19歳男児、15歳男児、11歳男児
D	50代	パート	夫、子ども2人、本人	17歳男児、12歳女兒
E	40代	パート	夫、子ども2人、本人	16歳男児、11歳女兒
F	40代	パート	夫、子ども2人、本人	16歳男児、12歳女兒
G	40代	専業主婦	夫、子ども2人、本人	11歳女兒、8歳女兒
H	40代	パート	子ども2人、本人	12歳男児、8歳男児
I	40代	専業主婦	夫、子ども2人、本人	11歳男児、8歳男児
J	30代	専業主婦	夫、子ども2人、本人	10歳女兒、7歳女兒
K	40代	パート	夫、子ども3人、本人	14歳男児、11歳男児、7歳男児
L	40代	フリーランス	夫、子ども2人、本人	11歳男児、8歳男児
M	50代	フリーランス	夫、子ども1人、本人	12歳女兒
N	40代	経営者	夫、子ども2人、本人	14歳女兒、11歳男児
O	40代	自営業	夫、子ども2人、本人	11歳男児
P	40代	栄養士	子ども1人、本人、両親、妹	12歳男児

筆者作成

- ママ友の種類
- 1、母親自身が気が合い仲が良いママ友
→「個としての自分」が強い関わり
 - 2、親同士も子ども同士も仲が良いママ友
→「個としての自分」と「親役割としての自分」が強い関わり
 - 3、子ども同士が仲が良いから仲良くしているママ友
→「親役割としての自分」が強い関わり
 - 4、親同士も子ども同士もそこまで仲が良くなく同じ学校、習い事などに所属している知り合い程度のママ友
→「親役割としての自分」が強い関わり

図4 ママ友の種類

筆者作成

Q1：今までこの人とは仲良くなれないな、と思うママ友はどのような点で距離を置こうと思いましたか？（複数可）

- 選択肢：自分の子どもを注意しない、怒らない（しつけ観が違う）
教育観が違う
お金の使い方が自分とは違う
人の悪口をよく言う
口が軽い
空気を読めない
何でもずばずば聞いてくる
自分や子どもの自慢話をよくする
その他

《Q1 回答結果》

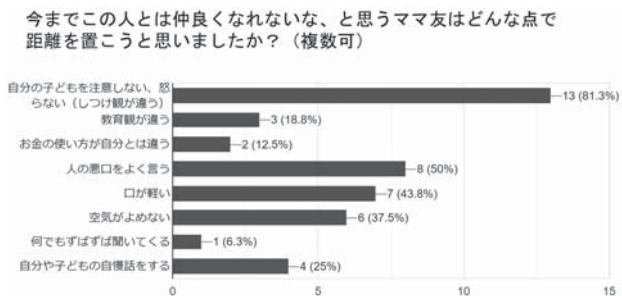


図5-① 仲の良いママ友の特徴アンケート回答結果（n = 16, 複数回答可）

筆者作成

Q2：仲の良いママ友はどのような点で気が合いますか？（複数可）

- 選択肢：教育観が似ている

- しつけ観が似ている
自分と趣味が一緒
空気が読める
性格が良い
人として信用できる人
話が面白い、話が合う
その他

《Q2 回答結果》

仲の良いママ友はどんな点で気が合いますか？（複数可）
16件の回答

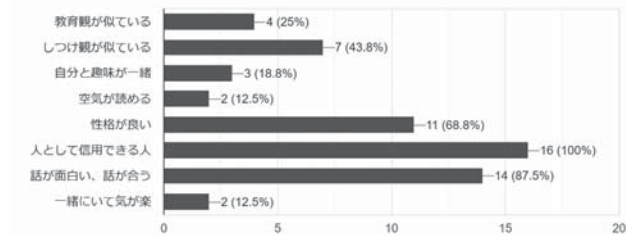


図5-② 仲の良いママ友の特徴アンケート回答結果（n = 16, 複数回答可）

筆者作成

Q3：仲の良いママ友に共通点はありますか？（複数可）

- 選択肢：教育観が似ている
しつけ観が似ている
自分と趣味が一緒
空気が読める
性格が良い
人として信用できる
程よい距離感を保てる
その他

《Q3回答結果》

仲の良いママ友に共通点はありますか？（複数可）

16件の回答

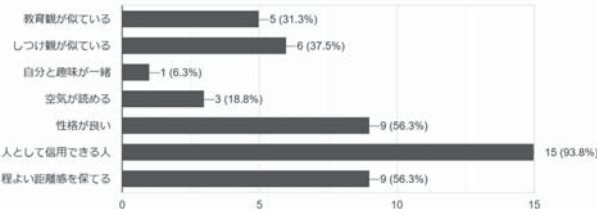


図5-③ 仲の良いママ友の特徴アンケート回答結果（n=16, 複数回答可）

筆者作成

Q4：仲の良いママ友、もしくは好きになれないママ友に関して何かご意見、エピソード等ありましたらお聞かせ下さい。（任意）

《Q4回答結果》

- ・価値観や道徳観念が近い人と仲良くなっていて逆の場合は深い付き合いにならない。
- ・好きになれないママ友は、自分の弱みを見せない人。上から目線に感じて、こちらも心を開きたくなくなります。
- ・ママ友と言えるかわかりませんが、人に自分の子どもの話をする時に「～ちゃん」「～君」と、自分の子どもにちゃんや君をつけて話す人とは、私は深く仲良くなれません。自分本位で非常識な方が多い気がします。
- ・仲の良いママは、話していて安心感があり、居心地がよいと感じるかな。
- ・人のことは聞いてくるのに、自分のことは隠そうとするタイプは苦手です。
- ・いい意味で一生涯懸命なんですけど、いちいち大騒ぎする人。子どもが虫歯になった時に色んな人に子どもに虫歯があるか、あったらこの病院がいいか、どんな治療をしているか聞き回っていた。ランドセルや机を買う時も同じ。一緒にいると疲れる人でした。
- ・笑わない方とはあまり仲良くなれません。

アンケートの結果（図5を参照）“仲良くなれないママ友の特徴”として一番選ばれたのは「自分の子どもを注意しない、怒らない（しつけ観の違い）」が81.3%だった。次に選ばれたのは「人の悪口をよく言う（50%）」、「口が軽い（43.8%）」となった。「教育観が違う」は18.8%で、仲良くなれないと感じた要因に教育観の違いは低い割合となった。インタビューにおいても「自分の子どもを注意しない、怒らない」親に関して具体的な話がいくつかあった。

母親にとって“怒らない親”は、相手の母親と距離を感じる最も大きな要因とも言える。

また、“仲の良いママ友はどのような点で気が合うのか”

という質問に対しては、「人として信用できる人」が100%という結果だった。次に「話が面白い、話が合う」が87.5%、「性格が良い」が68.8%となった。「しつけ観が似ている」は43.8%、「教育観が似ている」は25%という結果となった。ママ友は子どもを介して知り合う関係のため、しつけ観や教育観を重視する母親が多いと予測していた。しかしその考えとは異なる結果となった。母親がどのような点で相手の母親に対して気が合う、と思っているのかは、子どものしつけ、教育観よりも“人として信用できるか”、“話が面白い、話が合う”、“性格が良いか”など相手の母親自身の人間性を求めていることが明らかになった。母親同士が仲良くなっていく過程として、相手の“人間性”を重視しているのは、やはり子どもも関わる関係のため、自分の子どもに悪影響があってはいけないという母性本能から、より一層相手の人間性を判断基軸にしていると考えられる。

そして、“仲の良いママ友の共通点”についても「人として信用できる人」が93.8%、「性格が良い」が56.3%だった。「教育観が似ている」は31.3%、「しつけ観が似ている」は37.5%だった。仲の良いママ友の共通点も「教育観」「しつけ観」よりも「人として信用できる人」「性格が良い」といった人間性があげられた。インタビューにおいても協力者Cは、「今も付き合いのある人は、人として付き合える人。向こうが大事にしてくれるから私も大事にしようと思っています。」と述べていた。一方、「程よい距離感を保てる」も56.3%と高い割合を示した。仲の良いママ友とも程よい距離感を母親が求めていることが分かった。やはり、仲が良いといっても他人同士人であり、常識的な程よい距離感が必要だと考える。

そして、母親同士、仲が良くなるまでの期間についてもインタビューで聞いた。しかし、人によって期間は様々であった。協力者Aは「自分の性格的にじっくりと相手を見極めるタイプなので、仲良くなるのに時間がかかるかも。」と言っており、明確な期間は聞き出せなかった。本人も意識して相手の母親と付き合っているわけではなく、徐々に互いのことを知っていき、結果として自分と気が合うママ友との繋がりが残っていった。

一方、協力者Bは、子どもが乳幼児期に出会った同じマンションのママ友と一気に意気投合したと述べていた。お互い見知らぬ土地でママ友を求めていた時期に出会い、しかもほぼ毎日のように子どもと一緒に遊ばせていたとも述べていた。頻繁に会うことで相手に対する初対面の好印象を確信に変えることができたと考えられる。

また協力者Cは「本当に仲の良いママ友は、社宅、幼稚園繋がりで、がっつき付き合いがある人。毎日のように会ったりと密度の高い生活をしていたら自然と仲良くなる。」と述べていた。

協力者Gも「赤ちゃんの時は児童館だけの付き合いでその場限りのゆるい付き合いだったけど、幼稚園に入ってから付き合いが濃くなった感じ。」と述べていた。児童館で会った母親とはその場限りの付き合いで、幼稚園に入園してからは、毎日の送り迎えの中で自然と他の母親と仲良くなり関係も濃くなったと考えられる。

出会った状況、母親の性格でも仲良くなる期間はそれぞれ変化すると考える。しかし、会う回数が増えればその分会話も増え、互いを理解し合える可能性が高まる。初対面で気が合う母親を見つけられる人もいれば、会話を交わしながら徐々に互いを理解し関係が深まっていく者もいる。状況、性格によって仲良くなる期間は変化しうるが、会う回数が増えれば関係性も深まると考える。

3.6 ママ友の振分期・発展期

3.6では母親のライフワークに沿って、母親のママ友形成について記載する。

實川（2010）の先行研究を参考に母親のライフワークに沿ってママ友形成をまとめた（図6を参照）。

子どもが乳幼児期から学童期（小学生）のそれぞれにママ友の形成がみられた。例えば、子どもが幼稚園、保育園に入園するとその所属先のママ友が形成されていた。そして、小学校、中学校でも同じようにその所属先でママ友ができる。それは習い事も同じである。

そして、子どもが幼稚園から小学校、小学校から中学校など環境の変化があるタイミングでママ友との関係にも変化が生じた。母親自身の仲の良い親しいママ友とは、会う頻度が減っても関係はそのまま継続した。しかし、「知り合い」や「子どものためのママ友」とは子どもの幼稚園、小学校、中学校などの所属先が変わると関係継続がなくなっていた。このことは転居のタイミングでも同じ傾向である。

例えば協力者Aの場合、第1子の幼稚園入園を機に、母親学級で知り合ったママ友は10人から2人へ絞られ、残った2名は現在も家族ぐるみの付き合いをしていた。また、第1子が幼稚園から小学校に入学すると幼稚園の挨拶程度のママ友とは関係がほぼなくなっていた。協力者Bでも同じことが言える。転居のタイミングで転居前の挨拶程度のママ友とは関係が途絶え、同じマンションだった気の合うママ友とは現在住まいが離れても年に1回家族ぐるみの旅行をしていると述べていた。

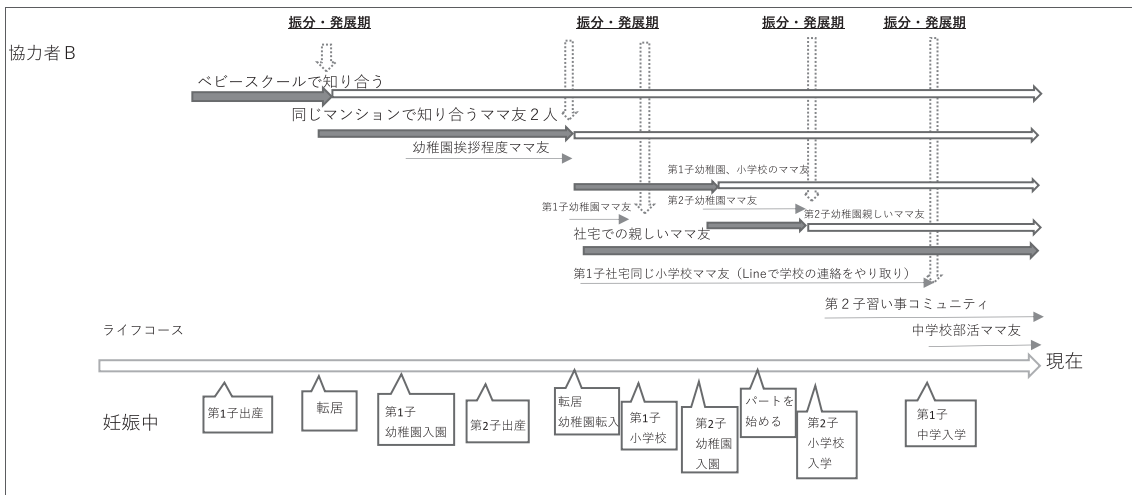
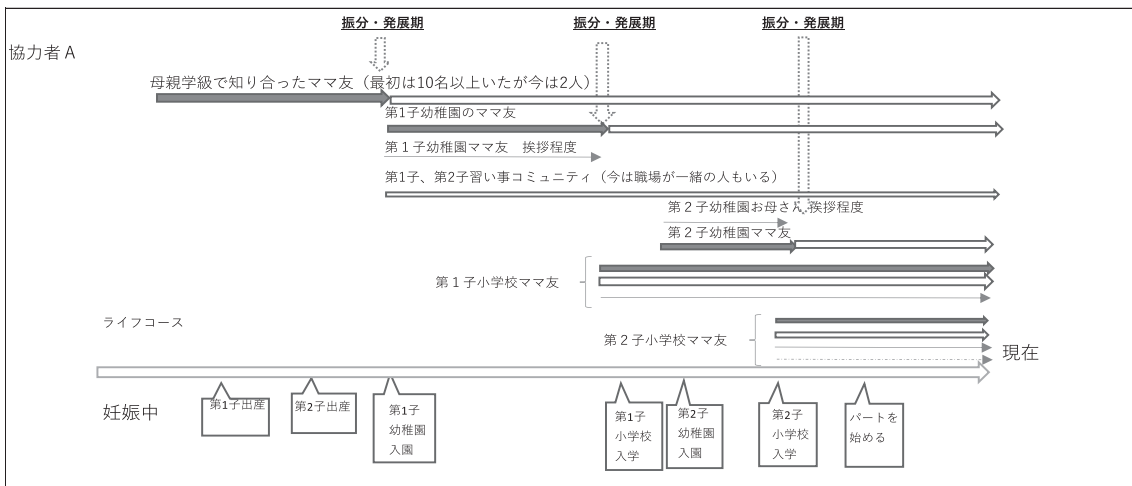
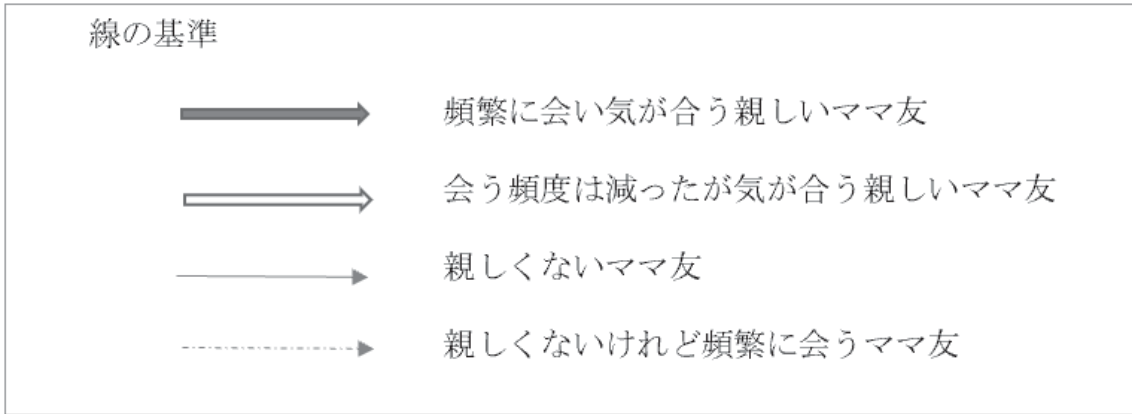
このように、転居や子どもが幼稚園から小学校に入学するなど環境の変化において、母親は自分と気が合う「個としての自分」との関わりが強いママ友とは関係をその後も継続していた。幼稚園は送り迎えが必要なため、母親同士ほぼ毎日顔を合わせる機会がある。しかし、子どもが小学生になると子ども一人で学校に登下校し、必然的に親同士

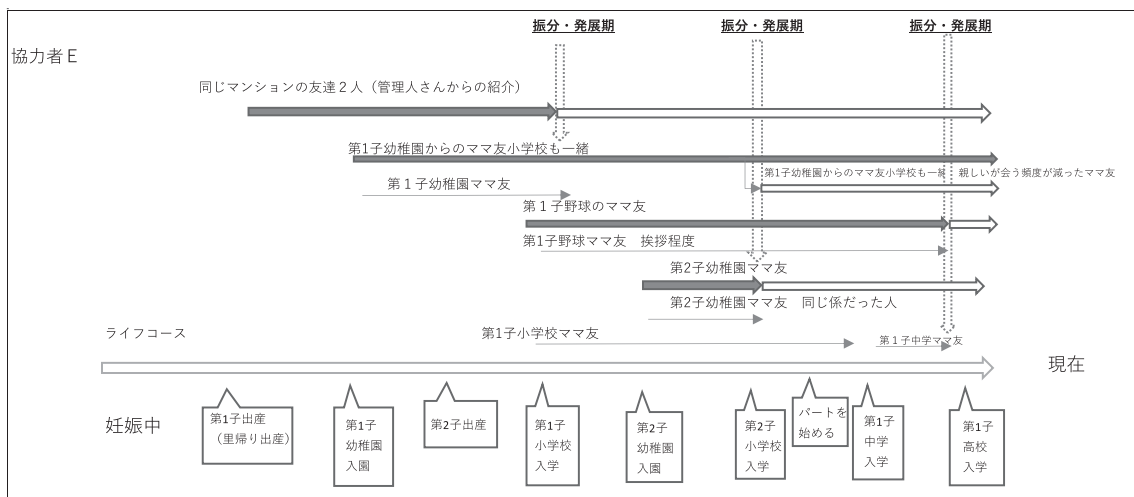
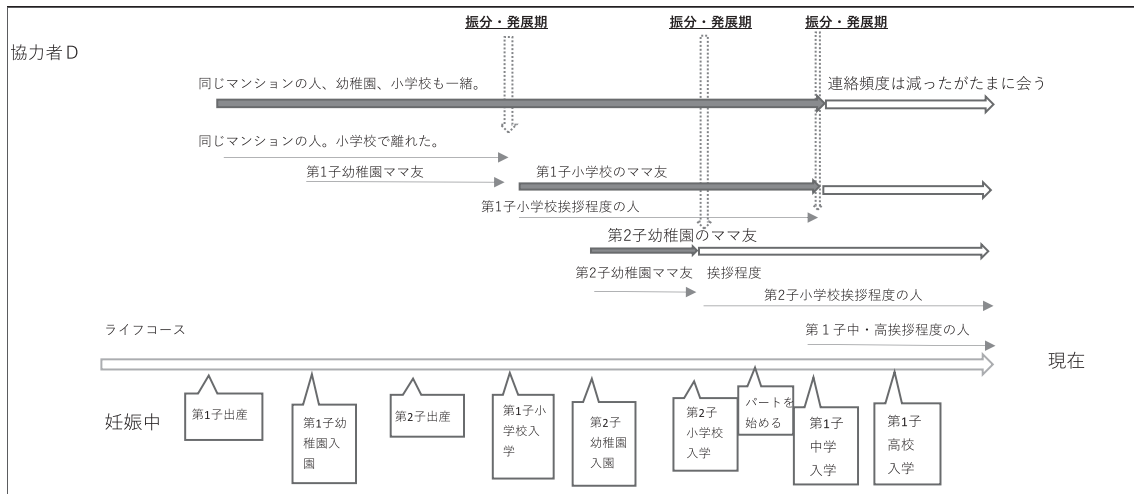
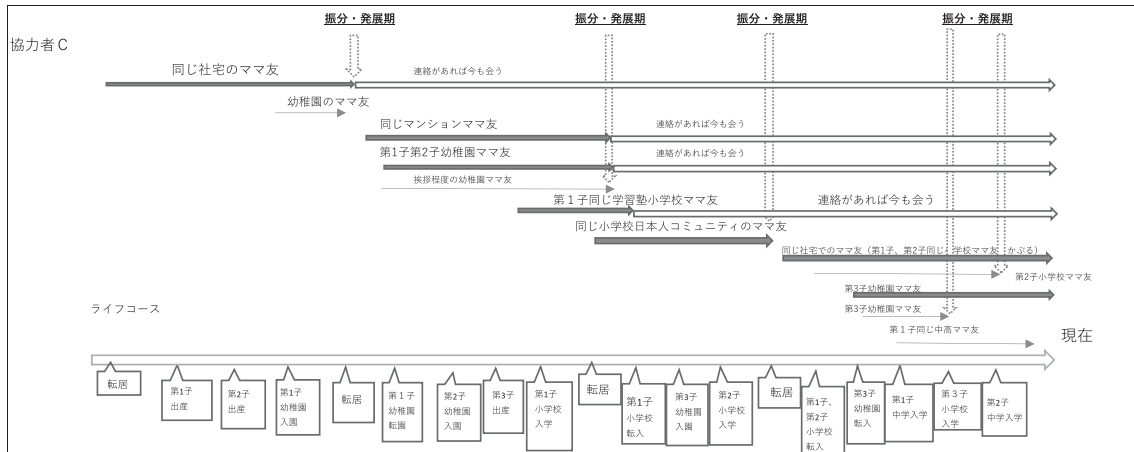
の接触機会も減る。母親は自分から働きかけない限り他の母親と会う機会が減る。転居した際も同じ事が言える。転居前の母親とは、自ら会おうと行動に移さない限り会う機会が減る。母親は自分と気の合う仲の良いと感じている母親とは関係を継続し、「子どものためのママ友」や挨拶程度の「知り合い」とは環境の変化と共に関係も途絶えていた。母親は無意識に、今後も付き合いしていきたいママ友とそうでないママ友とを環境の変化毎に振り分けていた。この時期を「振分・発展期」と命名する。「子どものためのママ友」や「知り合い」は、転校、卒業、転居のタイミングで関係を切られ、環境の変化で大きく左右される。一方「親のためのママ友」や「親子のためのママ友」は、子どもの学校、住まいなどの環境の変化があったとしても、会う頻度は減るが関係は継続していく。

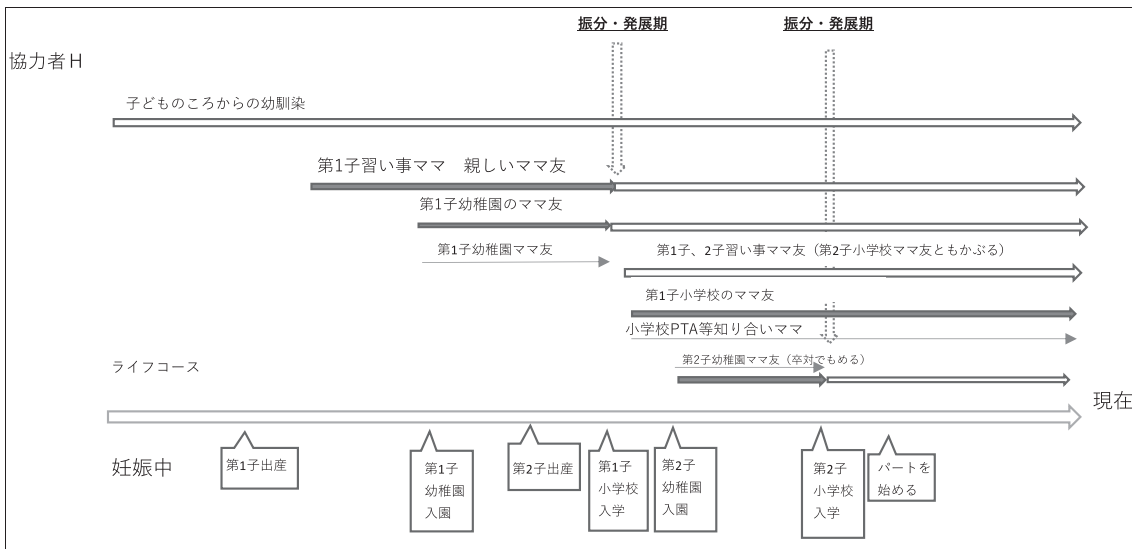
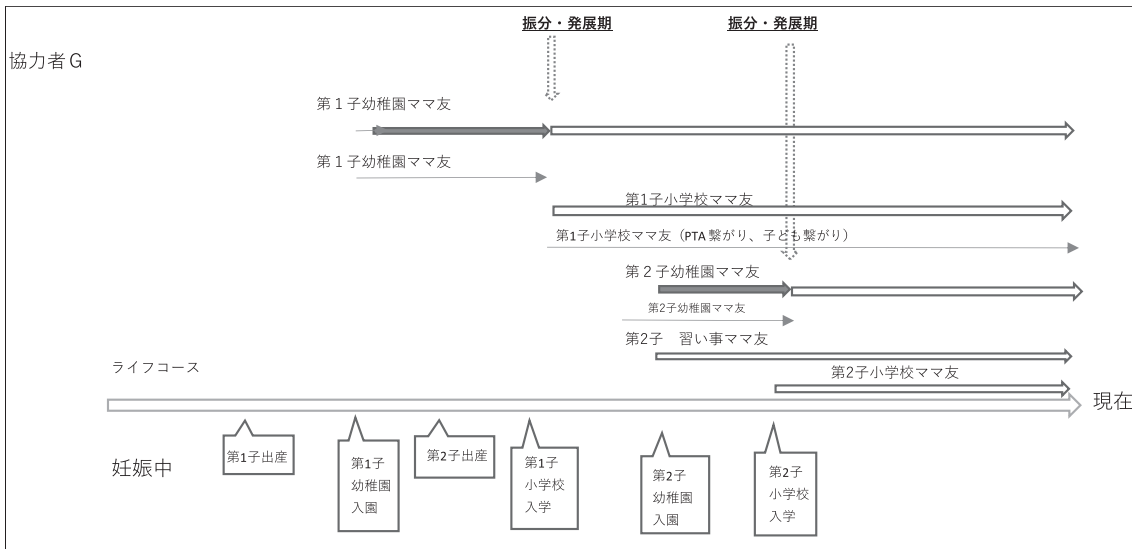
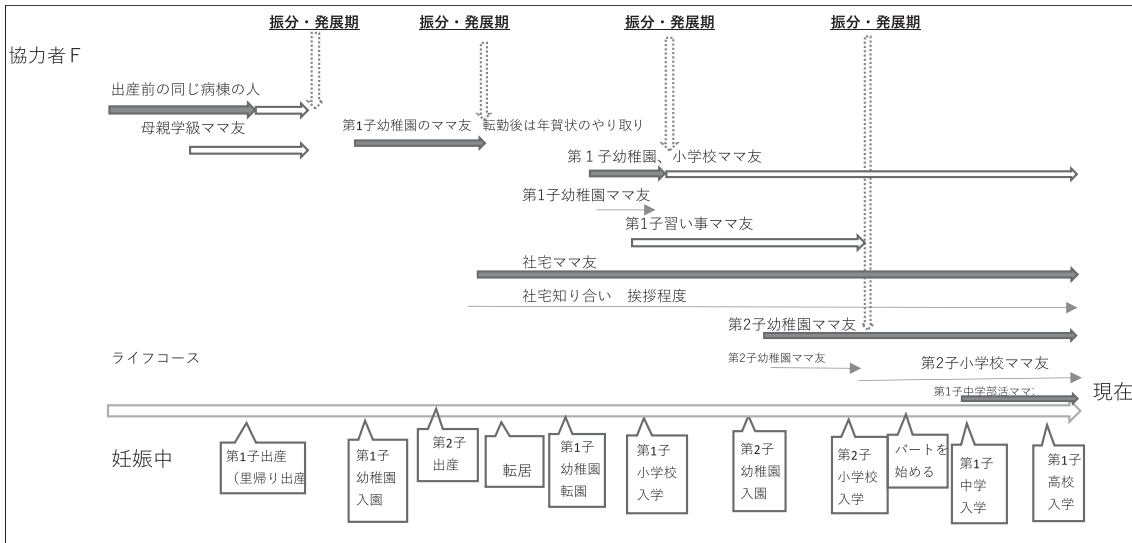
協力者Aは、第2子の「子どものためのママ友」である小学校のママ友に対して「今だけの関係と割り切って付き合い合っている。」と述べていた。「子どものためのママ友」として、あくまで子どものために母親は関係を維持していることが分かる。協力者Aは、相手の母親に対して教育観やしつけ観の違いから、表面的には仲良くしていても自分個人としては距離を置いていた。このことは就労している母親（図6 協力者L、M参照）にも同じことが言えた。子どもが保育園に入るタイミングまたは小学校に入学するタイミングで、挨拶程度の親しくない母親とは関係が絶えていた。

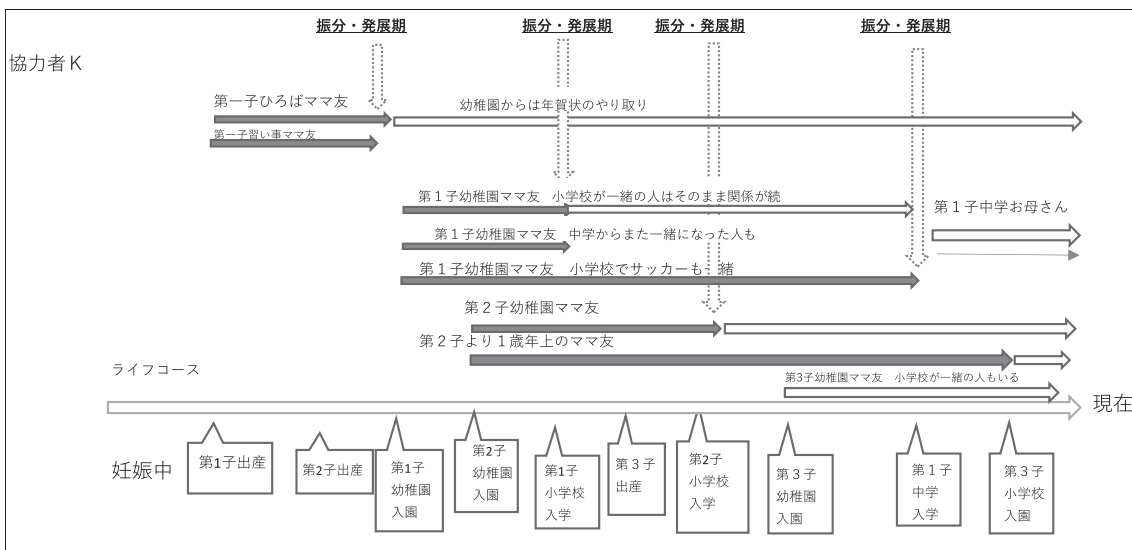
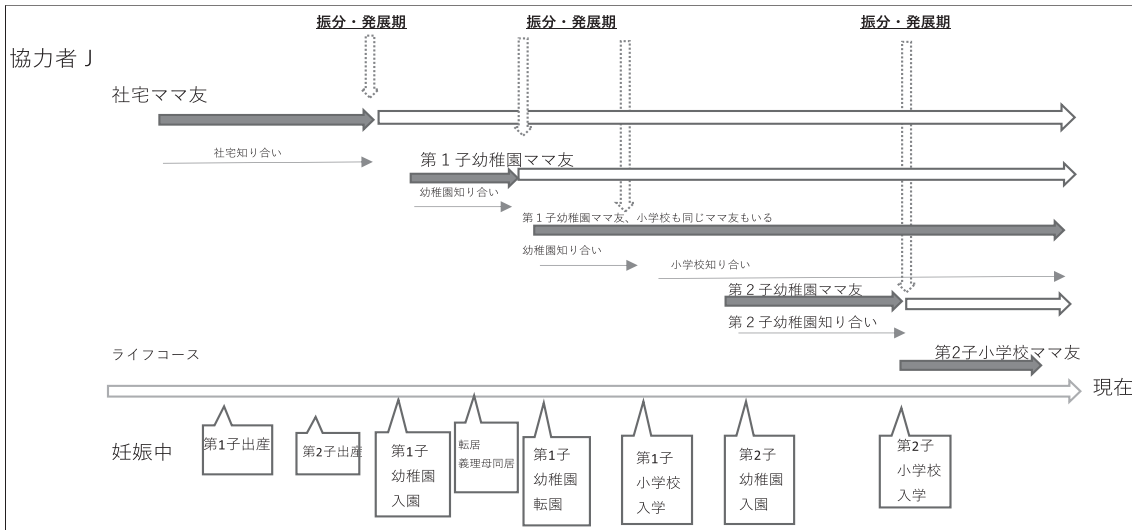
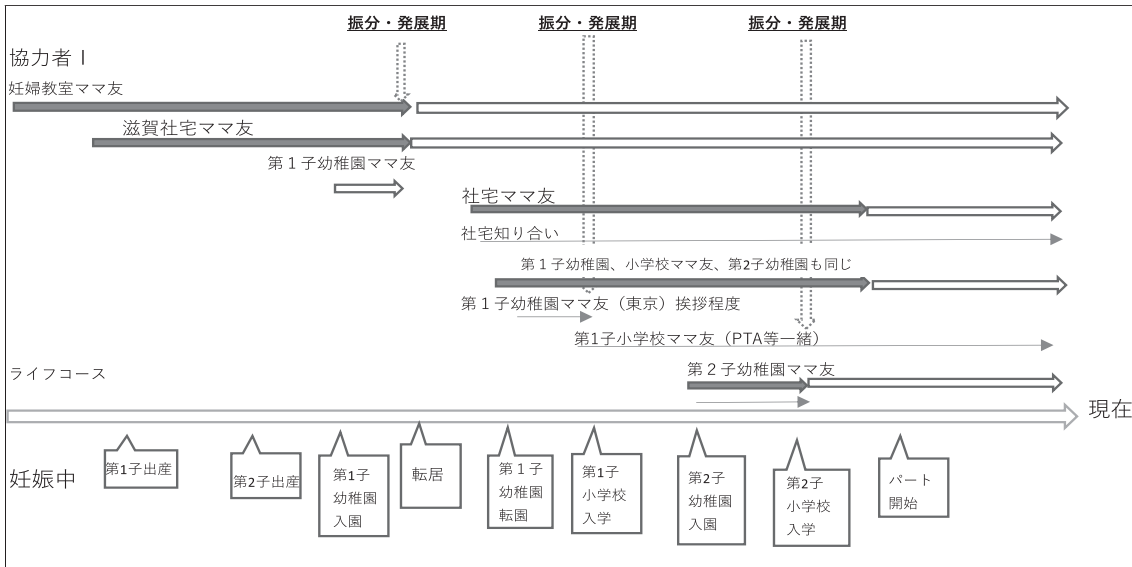
また、振分・発展期を経て、今も関係が続く仲の良いママ友の数についても調査した。その数は人によって様々だったが、子どもが保育園に通っていた母親より幼稚園に通っていた母親の方が仲の良いママ友の数が多いことが分かった。保育園は送迎時間もばらばらで母親同士の接触が幼稚園より少ない。その分幼稚園の母親の方が、仲の良いママ友の人数が多いのは当然だと言える。また、兄妹の人数にも左右されるが、保育園に子どもを通わせていた母親の仲の良いママ友の数は平均で7人、幼稚園に通わせていた母親は19.2人だった。ただ、今回の協力者は小学生以上の子どもをもつ母親を対象にし、子どもの年齢の上限は設けなかった。そのため、兄妹の年齢が高い母親は、その分他の母親と知り合う機会が多いため、仲の良いママ友の人数も多い傾向となった。

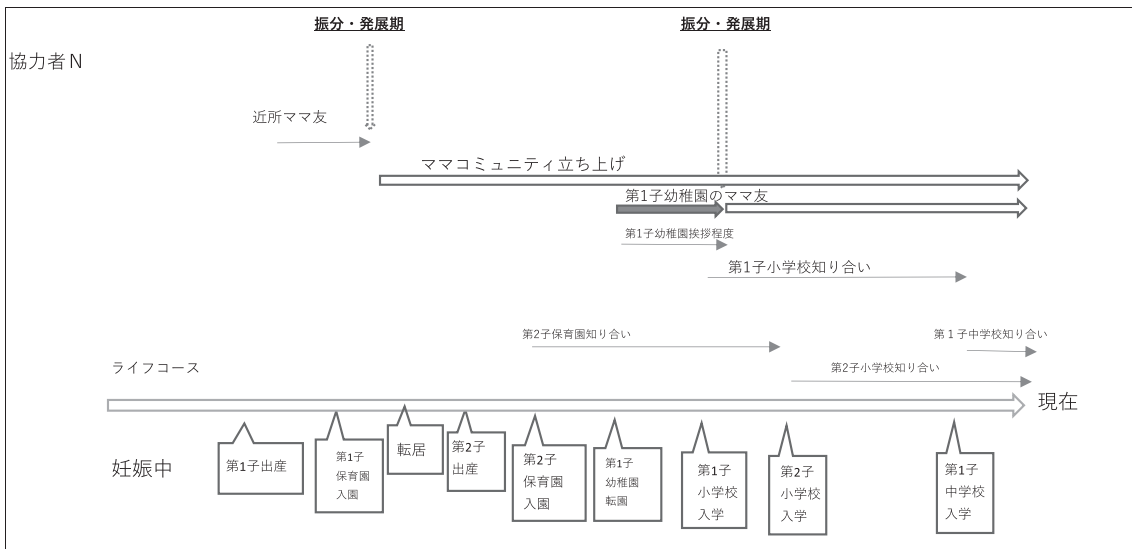
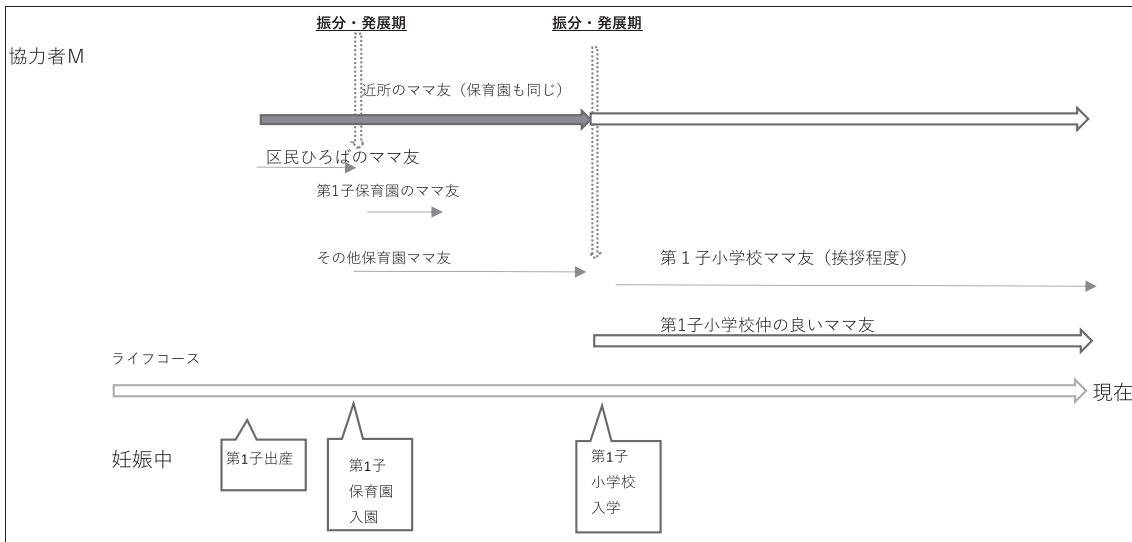
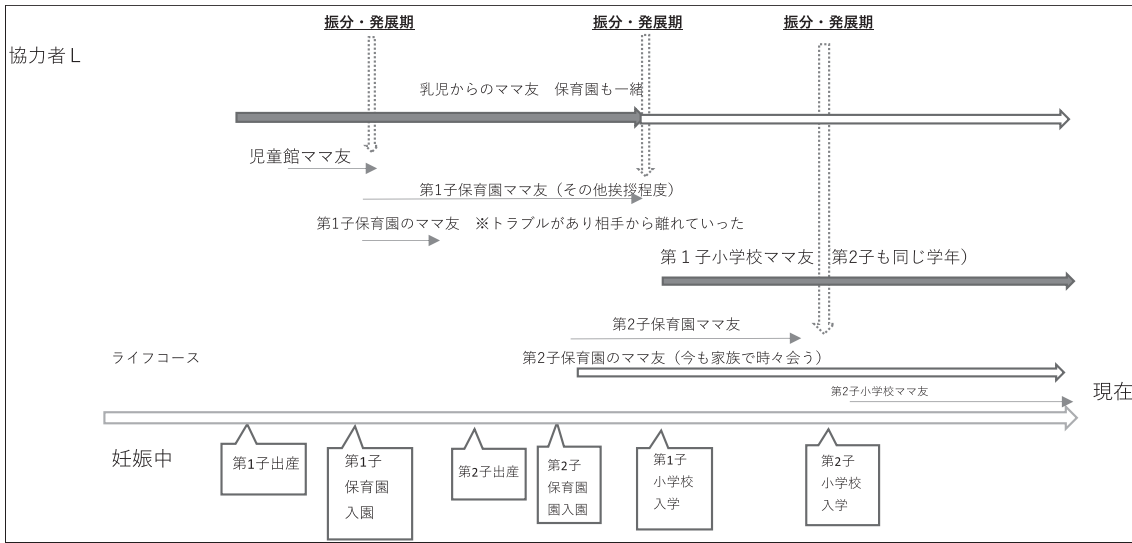
また、インタビューにおいて仲の良いママ友の人数を母親に聞いた際、その場で思い出しながら人数を数えている者もいれば、仲の良いママ友の線引きに迷っていた母親もいた。そのため、だいたいの人数を答えてもらった母親もいた。よって今回算出した仲の良いママ友の数は目安として参考にさせていただきたい。











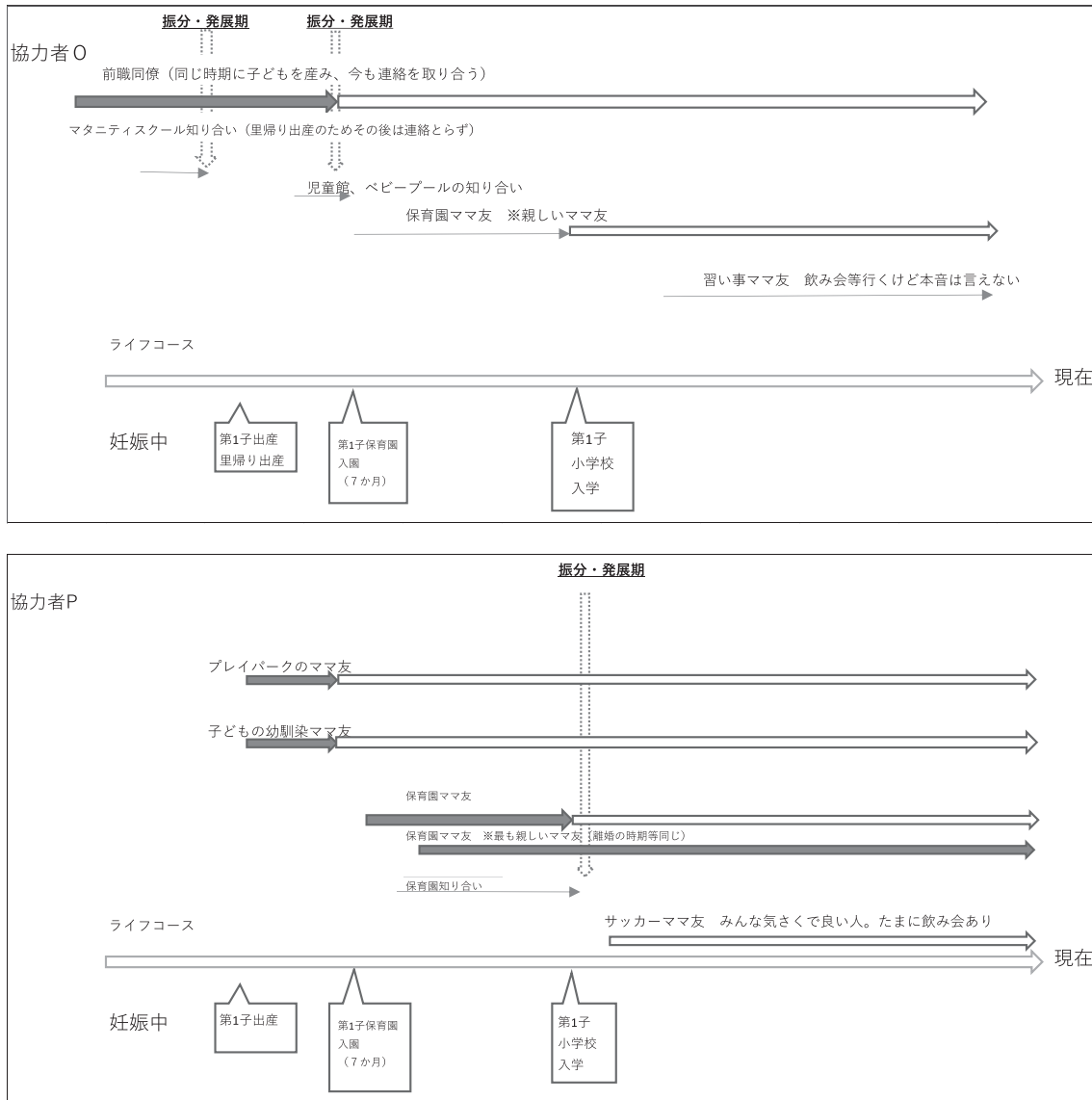


図6 母親のママ友振分・発展期（母親のライフワークに沿ったママ友形成）

筆者作成

3.7 ママ友付き合いが楽になる時期

インタビューを通して16人中15人の母親が、幼稚園もしくは保育園の時より「今の方がママ友付き合いが楽」と回答した。残りの1名（協力者O）は、子どもを保育園に通わせていた母親だった。「うちの子どもが通っていた保育園は、土日や平日も遅くまで保育してくれる保育園で、周りのお母さんとても忙しそうでした。送り迎えの際は、ほとんど顔を合わせることもなく、保育園のイベントの時にしか話すこともなかったです。保育園のお母さんとは、子どもが小学生になってからの方が親子で会う機会が増えたように思います。」と述べていた。保育園は幼稚園に比べ保護者同士顔を合わせる機会も少なく、母親自身無理して付き合う事が少ないと考えられる。協力者Oの場合、遅くまで保育してくれる保育園に子どもを預けていたため、

他の母親と顔を合わす機会が少なかった。子どもの成長の中で心配事があると保育園の先生に相談していたとも述べていた。そのためママ友を積極的に作ろうとしなかった、とも言っており他の協力者と比べて、気を遣うママ友が少なかったと考えられる。

子どもが小学生になると、親子でのセットの時間も減り、物理的にも母親同士の接触が減る時期になる。子どもの交友関係と自分の交友関係を切り離してママ友を形成できる。

さらに、子どもが小学生になる振分・発展期を境に乳幼児期の「子どものためのママ友」や「知り合い」程度のママ友との関係もなくなるため、自分と気の合う「親のためのママ友」や「親子のためのママ友」だけが残り、ママ友もよりはっきりと振り分けられ、交友関係が楽になると考えられる。

そして、幼稚園、保育園は保護者の送迎が基本必要だが、小学校は子ども一人で登下校するため、子どもの送迎がなくなり物理的に母親に時間ができる。また、子どもが一人で登下校することで、母親同士の社交的な付き合いも減る。幼児期特有の叩く、ひっかく、噛むなどの手が出るようなけんかも減るため、トラブルを心配する機会も減る。このような精神的なゆとりも母親が“小学生の今の方がママ友関係が楽”と感じる要因の一つと言える。

3.8 母親にとってママ友の存在

インタビューの中で母親が“自分にとってのママ友”に関する語りの部分をそれぞれ下記に記した。

A「母親学級からのママ友には支えられているかも。話せば安心する。自分のためのママ友。ママ友は自分のためにも子どものためにも必要。子どもが小学生になった今は、会えばお互い言いたいことを言い合え、ストレス解消のはけ口となっている。」

B「長女の中学受験の時は、受験生活の間浮き沈みがあって悩み、連絡しあったりしました。今は連絡の頻度は月1回くらい長文をLINEで送り合う感じです。夏休みや年末に家族で今も会いに行っています。」

C「ママ友がいなかったら子育てやっていけない、ストレス発散の場と安心の場。会って楽しい人とは繋がっている。自分が不安定の時には特に物理的に関係のない人に会うとすごいストレス発散になる。」

D「友だちのなかでは一番大事。精神面で。幼稚園の頃はママ友だったかもしれないけど、今は友だち？自分の居場所って感じでホッとする。頑張らなくてもよい。子どもが大きくなってきたからママ友との付き合いが楽になったのかな。」

E「乳児の頃は不安で自分からママ友を求めていた。もし当時できなかつたら引きこもっていたかも。仲が良い人は共感するポイント、怒るところ、教育方針のようなものは一緒。

ママ友は息抜き相手でもあり、よき相談相手だと。ママ友にしかわかってもらえないこともあるし。乳幼児期からのママ友とは、今はほとんど子どもの話をしない。ちょっとしたことで昔は相談したけど、今はとりあえず自分で解決する。昔より今の方が付き合いが楽かな。」

F「もうママ友というか友だち、ありがたい存在。精

神面でも。人生にとって必要な存在で感謝な気持ちがいっぱい。ママ友は年齢が違ってても上下関係がないから面白い。」

G「ストレス発散、おしゃべりして楽しい。今付き合い合っている人は友だち。ママ友に話すと安心するし、旦那、親に言って分からないことをママ友に話している。仲の良いママ友に良いよと言われたことは信じちゃうよね。」

H「仲の良いママ友はいてくれるだけでありがたい。夫が亡くなったときもママ友にはたくさん助けられました。居心地が良い人、気を遣わない人が残っています。ママ友がいたから子育てできた、情動的なことも含めて。信頼しているママ友からの情報は信頼度が違うように思います。ネットの口コミ、情報とは違う感じ。今は受験で子どもに手がかかるから余裕がないけど、もともと好きな人とだけ付き合い合えばよいという考えだからそんなに友達も多くなくて。昔は親子で会っていたけど、今は親だけで会っています。」

I「引越先では先輩ママにはとても助けられました。今でも仲の良い人とは家族ぐるみで旅行している、ありがたい存在です。」

J「ありがたい存在、子どもの相談をしたり、色々な情報交換したり、ランチ行ったり、時には飲んだり日々を穏やかに過ごせるのはその人たちのお陰。ママ友は必要でしょ。」

K「子どもが幼稚園卒園したり学年が違ったりしてもいまだに仲良くしているママ友に関しては、普通に友だちだと思って付き合い合っています。」

L「ママ友は戦友、かな。月並みですが。初めての子育てで右も左もわからず、旦那も最低限協力はしてくれましたが、やっぱり深いところの悩みを共感してくれたり、アドバイスをくれたのがママ友でした。振り返ってみると、ママ友がおらず孤立していたら今までやってこられなかったと思います。学校の友達とも、仕事仲間とも違う、別の絆がママ友にはあるなど。もうひとつ、ママ友は自分と地域を結ぶ架け橋や媒介にもなっているように思います。ママ友が別のママ友、地域の行事や人を結んでくれて、さらに自分も媒介を担う時もあるって、そうやって人の輪が繋がっていくのを感じました。学校やPTAもしかり。自分一人だったら、これだけ地域とつながるのは無理だったと思

ますし、そういう意味でママ友の存在はコミュニティー形成の鍵になっていると思います。」

M「ママ友がもしいなかったら子育てできなかったと思う。相談、愚痴、ストレスのはげ口。小学校も孤立しているお母さんもいるけど、もし自分がそうだったらと思うと怖いですね。」

N「今のママ友は本音分かる。付き合いが長くなるとお互いの家族のことも知っているし生活状況も分かった上で付き合いがあるので、マウンティング、という言葉がありますがそういう事もしなくてもよい、ポジショニングしなくてもよい関係性になれる。卑屈になっているお母さんに対しては、周りも付き合いづらくなると思うので。」

O「ママ友がいなくても小さい時に乗り切れたのは保育園の先生の影響が大きい。おむつ替え、離乳食の相談など先生にしていたからママ友の必要性を感じなかった。5人のお母さんとは1歳くらいから続いている人。保育園の時はあまり会わなかったけど、小学校に入ってから、定期的に子どもと一緒にご飯を食べたりしている。学校がみんなばらばらだから余計に情報交換したいと思うのかも。」

P「基本にお友だち付き合いが上手ではなく、お友だちも少ないけど、子どもが小さい時は、先輩ママには子育ての悩みなどをいつも聞いてもらったり、助けてもらった。今は、保育園ママの一人が一番繋がりが強い。離婚時期も同じで、同じ痛みを分かち合っている感じ。」

今も関係が続いている仲の良いママ友に対して母親は「ありがたい存在」、「ストレス発散の場」、「話すとお心する(場)」、「ママ友がいなかったら子育てできなかった」などとプラスに捉えていた。仲の良いママ友は母親にとって情緒的な安心、ストレス解消の受け皿となっていると考えられる。それは子どもを育てる者同士にしか分かり合えない悩み、心配事も共有できるからだ。特に第1子はすべての体験が初めてで、母親が抱える不安やストレスは計り知れない。それらの不安やストレスを仲の良いママ友に話すだけで母親自身気持ちが落ち着く。ママ友が母親の情緒的な安定剤になっていると言える。

しかし、3.5のママ友に関するアンケートで「仲の良いママ友に共通点はありますか?」という質問に対して56.3%が“程よい距離感を保てる”と答えていたのも事実だ。母親は時と場合によって話す相手を選んでいる。例えば

子どもの受験時など同学年の子どもはライバルになりうる。今まで何でも相談していた身近なママ友でも言えないことが発生する。そういった時は物理的に距離が離れていたり、学年が違ったり、子どもが異性だったりと自分の子どもとなるべく条件が重ならない母親に相談していた。時と場合によっては距離が近いから言えない事もあり、母親はその時々で話しやすいママ友を選び、交友関係をうまく保っていた。

3.9 ママ友間での情報共有と内容

3.9では、仲の良いママ友同士では日常的にどのような会話が交わされているのかをまとめた。あくまで仲の良い母親同士の普段の会話を調査するため、いつも通りの場所でいつものメンバーが集まる状況で会話を録音させてもらった。一つは、筆者が通っているお花教室、もう一つは同じ公立小学校に通っている同学年の母親同士の会話となる。協力者プロフィールは図7を参照。

サンプル1 ママ友が主催するお花教室に通うママ友	
日時	2019年10月24日
人数	6名
協力者の詳細	同じ幼稚園出身のママ友同士(子どもの学年が同じ)
子どもの年齢	小学生以上
会話時間	約4時間

サンプル2 子どもが同じ小学校同士のママ友	
日時	2019年12月19日
人数	4名
協力者の詳細	同じ幼稚園出身もしくは子どもが同じ習い事をしていたママ友同士
子どもの年齢	小学生以上
会話時間	約4時間

図7 ママ友同士の会話 協力者詳細

筆者作成

サンプル1は月に1回の定期的な集まりである。幼稚園が同じで今は別々の小学校(2名だけ同じ小学校だった)に通っているため子ども同士の繋がりはなくなり、「親のためのママ友」同士である。

サンプル2は同じ小学校同士のママ友でPTAの仕事も一緒に行っているため週2、3回は顔を合わせているメンバーである。子ども同士も仲が良く「親子のためのママ友」同士である。

まず、サンプル1の会話内容を3つに分類した。詳細は下記の通りである。

①世間的に今話題になっている話(ワイドショーなどテレビでも取り上げられているような話題)

サンプル1 会話内容

①世間的に今話題になっている話	②自分が聞きたいこと, 知りたいこと	③自分の体験, 友人, 家族から聞いた話を共有
・ラグビーに関して	・葉の話 (ジェネリックについて)	・友人の台風被害について
・皇室に関して	それに関連して近所の薬局の対応について	・台風水没地域の話から春日部の地下神殿について
・東京オリンピックのマラソンに関して	・社宅の修繕費について	・ハザードマップ地域の土地の値段について
	・近所マンションの建設について, マンションの立地について	・ふるさと納税, 返礼品の良し悪しについて
	・節税の話	・幼稚園の知り合いお母さんの近況について
		・兄妹げんか, 6年女子の反抗期について
		・姉妹の結婚式の話. 田舎の結婚式について
		・近所の100円, 飲食店について
		・有名パン屋がデパートに臨時出店すること
		・Google マップについて

図8 母親同士の会話内容

筆者作成

②自分が聞きたいこと, 知りたいこと

③自分の体験, 友人・家族から聞いた話を共有

サンプル1での総話題件数は17件で, ①の世間的に話題になっている話は3件, ②の自分が聞きたいこと, 知りたいことは4件, ③の自分の体験, 友人・家族から聞いた話を共有するは10件となった。会話の中で子どもに関する話は1件のみとなった(図8を参照)。

子どもに関する話題が少なかったことと, 話題の中では③の自分の体験, 友人, 家族から聞いた話を共有する内容が一番多かったことが明らかになった。仲の良い母親同士では, 母親は自分が体験したことや見聞きしたことを互いに共有し合う。そこで会話される内容は多岐にわたっていたが, 共有し合うことでそれぞれがさらに情報を入手でき, また他のママ友に情報が伝達されていく。

次にサンプル2の会話をサンプル1同様に3つに分類すると, ①の“世間的に今話題になっている話”は0件, ②の“自分が聞きたいこと, 知りたいことに関する話題”は1件, ③の“自分の体験, 友人, 家族から聞いた話を共有”は14件となった。サンプル2のメンバーは週に2, 3回顔を合わせているため①, ②の話題はすでに出尽くし, その日の話題は③が中心になった可能性が高い。また, 子ども同士も仲が良く同じ小学校に通っているため, 子どもの話も多かった。(サンプル2の会話内容は個人情報が多かったため詳細については省略させていただきます。)

自分の子どもに関して, 子どもが通っている習いごとのこと, 塾の話, これからむかえる中学受験の話など, 会話総件数15件のうち6件が子どもに関わる内容となった。サンプル1より子どもの話が多かったのは, 同じ小学校のママ友同士で子ども同士も仲が良いからだと考えられる。

仲の良いママ友同士の会話内容は, 集まった母親の属性(子どもが同じ学校, 習い事かなど), 子どもの年齢にも左

右され, また会う回数によっても会話内容が変わると考えられる。しかし, どちらも自分の体験, 友人, 家族から聞いたことを中心に共有し合っていた。

3.5において, 仲の良い気の合うママ友の共通点として「人として信用できる人」が一番に選ばれたように, 信用できるママ友同士の会話は母親にとって影響力があると考えられる。母親は, 振分・発展期を経て, 自分と気が合う信用できる母親との繋がりを継続しながらお互い情報を共有し合っている。気心の知れたママ友同士の情報は, インターネットの口コミとは信用度も影響力も違うと言える。

母親は気の合う母親と会話することで, ストレス解消し情緒的な安定を得ている。それと同時に情報も共有しながら日常生活に活かしている。インタビューの中でも「仲の良いママ友に良いと言われたことは信じちゃうよね。(協力者G)」, 「信頼しているママ友からの情報は信頼度が違うように思います。ネットの口コミ, 情報とは違う感じ。(協力者H)」, 「ママ友はいて良かった。子育ては情報。今は会話の中身は子どもの話は意外と少ないけど。(協力者D)」と述べていたように母親にとってママ友からの情報は, 子育てをする上でもなくてはならないものと言える。

4 考察

4.1 調査結果からみた検証とママ友ネットワークの影響

本研究では, 母親間でのママ友交友関係の形成, 発展を明らかにし, 母親間で交わされる情報交換は, 母親にとって必要不可欠であり, 母親一人一人が情報の懸け橋として情報発信の担い手となる可能性について母親へのインタビュー, アンケート調査を用いることで検証していった。

仲の良いママ友は“母親にとってどのような存在か”については, 会って話すだけでストレス発散, 不安解消などの情緒的安定剤としての役割を果たしていたことも明らか

になった。その前提には、子どもを育てる者同士にしか分かり合えない悩み、不安、苦勞がある。それらを言葉にしなければ、何気ない会話が母親にとっては、ストレス発散、不安解消となり精神的な支えにもなっている。

母親は子どもが所属する幼稚園、保育園、学校、習い事などそれぞれの場所で仲の良いママ友を形成しており、関係を継続している（図6を参照）。仲の良いママ友とは、自分の身の回りの出来事、体験、友人、家族から聞いたことなどを共有し合い、そこから得た情報はまた違うママ友へと共有している。母親一人一人が情報の懸け橋となっていたことが明らかになった。

また、仲の良いママ友からの情報は母親にとって信用度も高く、その影響力はネットの口コミよりも大きい。ネットの口コミよりも素性の知れたママ友から、対面で得られた情報の方が影響力が大きいのは言うまでもない。なぜならば、素性の知れた信用しているママ友からの情報は、信頼性があるからだ。

これらのことを踏まえると、本論文の研究目的である、「母親一人一人が情報発信の担い手となっているのではないか」という筆者の仮説を検証する知見は十分に得られたと言える。

母親は意識しなくともママ友との会話を通して情緒的な安定と、日常生活に活かせる情報を共有しあひ家族が豊かな生活を送れるよう賢く生きていくと言える。

また、母親同士の情報共有は、良い情報もあれば悪い情報もある。録音した母親同士の会話の中にも、薬局で横柄な対応をされた内容を共有していた。悪い情報は、母親にとってよい会話材料となる。母親の感情のこもった会話内容は聞いている母親にも大きな印象を残す。母親間で悪い情報が出回るとさらにママ友ネットワークによって一気に広がっていく。ママ友ネットワークの影響力が発揮される。

そして、共同養育という観点からも母親は潜在的に助け合う意識を持っているため、誰かが困っていたら助けようとする。LINEなどSNSで、ある母親が質問を投げかければ、同じグループの母親から次から次へと情報が集まってくる。例えば、筆者の周りに家を探している母親がいれば、良さそうな物件を見つけ次第、その母親に情報が集まっていた。子どもの習い事、塾に関しても同じだ。母親は意識せずともママ友ネットワークを活用している。

母親を敵にまわすような対応をしなければ、このママ友ネットワークは行政、企業にとっても大いに活用できると言える。

4.2 ママ友ネットワークの活用と可能性

母親同士の会話から、母親は自分が体験したこと、家族、友だちが体験して聞いたことを好んで共有することが分かった。また、実際誰かが体験した話は真実味があり母親

にとって貴重な情報となる。ママ友ネットワークを活用するならば、まず母親に体験してもらうことが一番理解を得やすい。しかも女性は一般的に一人よりも“つるむ”ことを好む⁷⁾ため、仲の良い気心の知れたママ友と一緒に体験することでママ友同士の会話から多くの意見、本音も聞き出せる。そして、体験した情報が他のママ友へと伝わり、母親自身が商品、サービスの情報発信者となる。

正しい情報を伝達するためにも、伝える側と受ける側が実際に対面した方が伝わりやすい。アメリカの心理学者アルバート・メラビアンが1971年に提唱した「7-38-55のルール」という概念がある。

感情や態度について矛盾したメッセージが発せられたときの人の受けとめ方について、人の行動が他人にどのように影響を及ぼすかということ、話の内容などの言語情報が7%、口調や話の早さなどの聴覚情報が38%、見た目などの視覚情報が55%の割合であった。（この割合から「7-38-55のルール」、*「メラビアンの法則」*と言われる。）つまり、人から受ける印象、信頼性は、言語よりも非言語（表情、態度、服装などの視覚的要素と声の調子など音声的要素）の方が圧倒的に影響力が大きい。

母親同士の情報のやり取りも直接会って会話することでお互い理解、関係性を深めているように、実際対面して交わした情報の方が母親にとって真実味がわくし共感も得やすい。手に取った商品や体験を母親が気に入る、共感を得られれば、母親は自分の体験を自然と他のママ友へ情報提供する。生きた情報がママ友ネットワーク内で交わされる。それは、企業が発する情報よりも母親にとって信用度が高い。

また、家族の衣食住に関わる商品を購入するのはどの家庭も母親が多い。生活に関わる商品を買うか買わないかは母親にかかっているとと言っても過言ではない。母親が欲しいと思う商品を提供できなければ購入されることは難しいだろう。商品開発をする上でも母親を意識した開発が必要不可欠となる。

現在も主婦の意見を募るモニターサイトは数多く存在する。例えば、『ママノワ』(URL: <https://www.mama-no-wa.jp/>)は主婦が体験した商品をSNSなどで発信する条件でモニターを募っている。サイト内にはプレゼント商品も掲載している。商品などを体験したモニターは個人の公開SNSに投稿しなければいけない。またママノワの公式SNSに転載、及び商品提供企業が自社サイトに掲載、販売促進活動に利用することを承諾条件としている。モニターは企業側に付度したコメントを投稿する可能性も十分考えられる。

また、マクロミル (URL: https://monitor.macromill.com/lp/ankeitou.html?entry_kbn=18&a8=t8cej8BDWwZh3Vf894oZ8Q0hSnnFvQpMM4pOS7QOkbgDWw7ROowv1S)

N9OvkKkSpMbTOZJcfM8ceEs00000013554002)のような調査会社のモニターアンケートなどもある。これらは個人で登録し自分の気に入った商品のモニターを体験したりアンケートに回答をする。小遣い稼ぎに参加している人も多いだろう。商品やサービスの提供側と受け手側の顔が分からない関係は、提供側の意図を受け手側がどこまで理解できるのか、また受け手側の本心や本当の意見が集められるか、などの課題も多いと言える。

主婦から率直な意見を求める場合、実際に対面した商品説明や商品、サービスを体験してもらうのが好ましいと考える。しかも気心の知れた仲の良いママ友と一緒にの方が母親の緊張も解け本心を引き出しやすい。母親から共感を得られるような説明、情報提供をすれば、母親は他のママ友へと自然に情報を伝達するだろう。仲の良いママ友グループを活用し意見交換できる場を提供すれば母親の本心も引き出せると考える。

母親の共感を得られれば、母親は実体験を仲の良いママ友に共有し、さらにママ友ネットワークによって生きた情報が他の母親へと発信されていく。母親一人一人が情報の懸け橋となり、情報が行き交うことになる。ママ友ネットワークによって多くの母親を味方につけることができる。

母親を味方につけ、母親間で交わされる情報交換を活用すれば、行政、企業にとってもきっとプラスに働きかけると考える。

核家族化などによる社会構造が生み出した母親の孤独、その孤独、不安から救いだししてくれるママ友との会話。そして子どもの成長、環境の変動によって変化するママ友交友関係、母親が本能として備えている共同養育など様々な観点からとらえた母親の繋がり方は、現代の母親たちが賢く子育てするために生まれたものとも言える。この母親たちの繋がり方を理解し、母親から共感が得られれば、ママ友ネットワーク内で良い生きた情報を行き交わせることもできる。

情報社会と言われている現代において、インターネットの情報よりもママ友からの情報を母親が信用している点は、母親同士の繋がり方の特徴がよくでている。身近な生きた情報は母親の感情を動かし、母親を動かす大きな力をもっていると言える。

4.3 今後の課題

本論文の調査は、2019年9月～12月に実施した。2020年から流行した新型コロナウイルスによって、人との接触が減り、母親同士の接触機会も大きく変化したと考えられる。コロナ禍が生み出した母親同士の交友関係についても今後調査の必要があると考える。また、時間的、物理的関係から研究範囲を豊島区、新宿区とした。しかし、別の地域によっては母親の属性、地域性から会話内容など多少違

う結果になりうる。また、公立小学校を対象にしたが、私立小学校の場合も結果が変化すると予測する。その点はさらに研究の余地がある。ただ、子どもが小学生以上に成長した母親のママ友交友関係に関する研究は、調査当時、筆者が調べた限りなかった。そして、ママ友の形成、繋がり方に注目し、さらに母親にとってママ友の存在から考えられるママ友ネットワークの活用までを提起した論文は他にはなく、新たな知見が得られたと考える。

5 おわりに

本論文を通して母親たちのママ友形成、繋がり方、母親にとってのママ友の存在を明らかにし、母親間で交わされる情報は母親にとって貴重であり、情報交換をする場も母親にとって意味のあるものだと分かった。幼児期はママ友との付き合いが重荷に感じることもある。しかし、子どもが小学生になると気の合わないママ友とは距離をおくことができ、自分と気の合うママ友中心の交友関係を築ける。また、母子分離によって自分の時間もできるため、母親にも余裕ができる。出産したばかりの頃は、先の見えない不安、核家族化の影響によって生じるワンオペから産後うつに陥る母親もいる。しかし、そうした不安を解消してくれるのも同じ境遇に置かれている母親だ。育児をしている者同士にしか分かり合えない不安を直接口にしなくても会って会話を交わすだけで落ち着くこともある。筆者も出産当時、見知らぬ土地で日中は子どもと二人だけ、という生活を何か月か過ごしたことがある。その期間は経験したことのない不安に襲われた。本当に自分に子育てができるのか、我が子なのにあまり可愛く思えない、そして何よりも睡眠時間が十分にとれないため肉体的にも精神的にも弱っていた。そんな時、同じ境遇の母親と出会う事ができたら、どんなに気持ちが落ち着いたら。当時はママ友に懐疑的な考えだったため自分からママ友をつくろうとせず、不安から逃げるように仕事に復帰し、子どもを保育園に預けてしまった。しかし、転居と2人目の出産を機に幼稚園に転園すると、自然とママ友ができ、仲の良いママ友もつくれた。そして、ママ友と会話を交わすこと自体が楽しく、支えられている気持ちも理解できた。自然とママ友への不安も払拭していった。確かに付き合いづらいママ友も中にはいる。しかし、子どもの成長と共に子供の所属先が変われば、今まで気をつけて付き合っていた気の合わないママ友とは距離を置くこともできるし、付き合う必要もない。自分と気の合わないママ友と付き合いなくてもよい時期が必ずくる。ママ友付き合いに不安を抱えている人や現在嫌な思いをしている人がいたら、嫌な思いに必ず終わりがくることをぜひ知っていただきたい。そして、子育てをする上で自分と気の合うママ友は自分にとってプラスに働きかけてくれると実感している。

本論文は、現代社会の母親の実状を分かっていたくためにも執筆した。核家族化が進んだ現代社会において、母親はうまく協力しながら子育てをし、家庭を守っている。(もちろん父親も毎日社会で奮闘し、家族を守っている。)母親同士の長話や井戸端会議には意味がある。都市部の母親が子育てをする上でママ友と繋がることは必然で、母親にとってママ友は精神的にも子育てをする上でも必要な存在となる。そして、母親同士の会話は情緒的な安定剤もさることながら、母親を動かす大きな力をもっていることを少しでもご理解いただくと幸いです。

注

- 1) 本論文ママ友の定義については3.3を参照
- 2) カースト、子どものけんか、しつけの違いから派生するママ友同士のトラブル等
- 3) 宮木 由貴子 (2004) 「「ママ友」の友人関係と通信メディアの役割—ケイタイ・メール・インターネットが展開する新しい関係—」, 第一生命経済研究所, 『ライフデザインレポート』第159巻, pp 4-15
- 4) 實川 慎子・砂上 史子 (2013) 「母親自身の語りにもみる「ママ友」関係の特徴—相手との親しさの違いに注目して—」, 『保育学研究』第51巻第1号 2013年
- 5) 大嶽 さと子 (2017) 「子育て期における母親同士の友人グループの特徴とその関わり方との関連」『名古屋女子大学紀要』63 (人・社) pp 369 ~ 379 調査期間: 2014年3月~4月
- 6) 實川 慎子 (2010) 「子育て期の母親の友人ネットワークの変遷—母親の捉える「知り合い」と「友達」に注目して—」『乳幼児教育研究』第19号, pp 37-47
- 7) 一般的に女性は、幼児期から単独行動よりグループでの行動を好む。学生の時、トイレに行くときでさえ友達と行動を共にする。男性にはみられない女性特有の行動と言える。

参考文献

- 原田 弘文 (2006) 『子育ての変貌と次世代育成支援』, 名古屋大学出版会
- 本田 由紀 (2008) 『「家庭教育」の隘路 子育てに脅迫される母親たち』, 勁草書房
- 實川 慎子 (2010) 「子育て期の母親の友人ネットワークの変

- 遷—母親の捉える「知り合い」と「友だち」に注目して—」『乳幼児教育研究』第19号, pp 37-47
- 實川 慎子・砂上史子 (2012) 「就労する母親の「ママ友」関係の形成と展開—専業主婦との比較による友人ネットワークの分析—」『千葉大学教育学部研究紀要』第60巻 pp 183-190
- 實川 慎子・砂上 史子 (2013) 「母親自身の語りにもみる「ママ友」関係の特徴—相手との親しさの違いに注目して—」『保育学研究』第51巻第1号
- 河村 真理子 (2016) 「Lineのトラブル—幼稚園児のママ友の世界—」『児童心理』70 (11)
- 金 娟鏡 (2011) 「「育児ネットワーク」構成員に関する日韓比較—非定型自由記述法を用いて—」『帝京平成大学紀要』22 (1), pp 119-127
- 工藤 遥 (2013) 「都市の子育てをめぐるサポートシステム」『現代社会学研究』26, pp 55-71
- 牧瀬 稔, 読売広告社 ひとみらい研究センター (2019) 『シティプロモーションとシビックプライド事業の実践』, 東京法令出版
- 松田 茂樹 (2008) 『何が育児を支えるのか 中庸なネットワークの強さ』, 勁草書房
- 宮木 由貴子 (2004) 「「ママ友」の友人関係と通信メディアの役割—ケイタイ・メール・インターネットが展開する新しい関係—」, 第一生命経済研究所, 『ライフデザインレポート』第159巻, pp 4-15
- NHKスペシャル取材班 (2016) 『ママたちが非常事態』, ポプラ社
- 野村総合研究所 (2019) 『知的資産創造』10月号 Vol. 27 No. 10, pp 26-45
- 大島 清 (1987) 『女の脳・男の脳』, 祥伝社
- 大嶽 さと子 (2014) 「「ママ友」関係に関する研究の概観」『名古屋女子大学紀要』60 (人・社), pp 37-43
- 大嶽 さと子 (2017) 「子育て期における母親同士の友人グループの特徴とその関わり方との関連」『名古屋女子大学紀要』63 (人・社), pp 369-379
- Pease, A. and Pease, B (2002) 『話を聞かない男、地図が読めない女』, 主婦の友社
- 総務省「課税標準額段階別令和2年度分所得割額等に関する調査」
https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_zeisei/czaisei/czaisei_seido/ichiran09_20.html
- 東京都総務局統計部 学校基本統計「学校基本調査報告書」, 令和3年度
- URL: <https://www.toukei.metro.tokyo.lg.jp/gakkou/2021/gk21qg10000.htm#shou>

Creation of a Network for “Mama-Tomo” Friendships and its Impact (with reference to Toshima-Ku and Shinjuku-Ku)

Mina Shiotsuka

Abstract

Some mothers suffer postnatal depression straight after they give birth due to uncertainty about the future and what can often be a one-person operation as a result of the effects of the nuclear family. Mothers can sometimes feel “mama-tomo” relationships to be a burden. However, it is the author’s belief that “mam-tomo” relationships do not necessarily need to be a burden on mothers, and they are in fact an essential aspect of childrearing. With the growing impact of nuclear families, particularly for mothers living in urban areas, “mama-tomo” relationships are a necessity, in terms of both mental and childrearing support.

In this paper, the author summarizes the role of “mam-tomo” relationships in the modern society that surrounds mothers and looks at network formation and its impact on friendships with other mothers. It also aims to clarify the information that is shared between mothers, and the potential for the mothers themselves to be involved in communicating information. Based on this, the author proposes the formation of “mama-tomo” groups and ways of utilizing their features.

Keywords: Mama-tomo, network, friendships